九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

The Self-Construal Scale: A Potential Tool for Predicting Subjective Well-Being of Individuals With Autism Spectrum Disorder

牧之段, 祥恵

https://hdl.handle.net/2324/4474978

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

（別紙様式２）

氏　　名	牧之段　祥恵
論　文　名	The Self‐Construal Scale: A Potential Tool for Predicting Subjective Well‐Being of Individuals With Autism Spectrum Disorder
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　須藤　信行 副　査　　九州大学　　教授　　大賀　正一 副　査　　九州大学　　教授　　鴨打　正浩

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder; ASD）は「社会的コミュニケーションおよび社会相互作用の持続的な欠陥」と「行動、興味、または活動の限定された反復的な様式」の２つの中核症状に加えて多様な周辺症状を呈し、またその生物学的背景も様々であるため、その病態は十分に解明されておらず、治療的介入法も未確立である。ASD の症状形成に文化的背景が寄与していることのエビデンスは蓄積されつつあるが、文化的自己観に着目した研究はこれまでになかった。そこで本研究では、31 名の高機能 ASD 患者と 60 名の定型発達者の文化的自己観の比較検討を行った。加えて、高機能 ASD 患者の文化的自己観について、IQ、逆境的小児期体験、注意欠如・多動症症状、ASD 症状及び主観的幸福感との相関から検討した。その結果、高機能 ASD 患者は定型発達者と比較すると、より相互独立的な自己観をもっていたが、予想に反して多くの ASD 患者(43.8%)が相互協調的な自己観を呈した。また、高機能 ASD 患者の文化的自己観は、就学前の ASD 症状、自律性の欲求充足及び関係性の欲求不満と非常に強い相関を認め、彼らの主観的幸福感の予測につながることがわかった。本研究から、文化的自己観尺度を用いた高機能 ASD 患者における文化的背景の検討が、ASD の多様な表現型を理解し、患者の特性に応じた適切かつ効果的な治療的介入を選択するために有用であることが示唆された。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって、調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。なお本論文は共著者多数であるが、予備調査の結果、本人が主導的役割を果たしていることを確認した。